

日中間のコミュニケーション・ギャップ考 (3)

—中国的“百科全書式”巨人・梁啓超と日本—

山本忠士

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of Communication Gap between Japan & China (3)

—The view of a Chinese Intellectual, Liang Qi-chao, toward Japan—

YAMAMOTO Tadashi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Liang Qi-chao(梁啓超) is well-known as an enlightened thinker and journalist during the last stage of the Qing Dynasty. He defected to Japan after the failure of the Hundred Day's Reform, which was one of the reform movements introduced during the Qing Dynasty. Liang Qi-chao contributed to the enlightenment movement through his newspaper in which devoted himself to Modern Western thought and insisted on the moderate reform and the creation of a constitution. This paper analyzes how Japan influenced his theory regarding Chinese reform. Through Japanese essays and essays about Japan published in 『LIANG QI CHAOQUAN JI』 (Beijing Publishing Corp), this paper examines the relationship between modern China and Japan

はじめに

近代の日中関係の悪化を象徴した外交問題に「21カ条の要求」があった。大正4年(1915)、この要求が、中国側に出された時、梁啓超は自己の痛憤の思いを次のように述べている。

「日本は、我国を第二の朝鮮なりと認識する勿れ。支那脆弱といえども、国民既に自覚し、この国ようやく毅然として大地に立ち、永久滅びずと言う一種の信仰を有す。従って、各人確乎不拔の精神在り。正義をもって我を待つものみな友たり。無礼をもって我に加える者何国人たるに論なく、皆これを敵とする。我が願いは、日本が我が国民に対し、国際交渉上、両国平等の国家たるを忘るるなからんことを。また我国、個人及び社会の思想に対し両国民は、同じく理性ある人類たるを忘るるなからんことを」⁽¹⁾

非常に押さえた表現ながら、断固とした、強烈な主張がそこにある。

梁啓超は、「中国百科式巨人」⁽²⁾と形容されるような該博な知識を持ち、清朝末期から中華民国初期にかけて、圧倒的な影響力を持った啓蒙家として知られる。明治末期(1898年)から大正初期(1912)年まで日本に滞在し、日本で受けた刺激(情報)を母国に送り続けた人である。いわば、近代における日中間のコミュニケーション促進に強い影響力を発揮した先達と呼び得る人でもあった。

「21カ条要求」を、日本の「朝鮮併合」と関連付けた危機感と「中国は既に自覚し、この国ようやく毅然として大地に立つ」との凜とした意思表示は、明治日本人の事績に学び日中間のコミュニケーション促進に尽力した梁啓超の、日本に対する忠告の言葉でもあった。

本稿は、梁啓超の業績を、『梁啓超全集』(北京出版社版)をもとに中国と日本との関わりについて考察し、近代における日中間のコミュニケーション・ギャップの生成を、梁啓超の日本観から論じよ

うとするものである。

今回、主として使用した『梁啓超全集』(以下『全集』と表記する)は、1999年7月に中国・北京出版社から刊行されたもので、全10冊からなっている。主編は、張品興氏で本書の底本は、1930年代に林志鈞氏が編集した『飲冰室合集』とある。内容によって区分別され、時代別に学術文章、詞論詞話、詞詞創作、戯劇小説、碑帖、年譜、書信等がそれぞれまとめられている。

全10冊の総数は、6303ページという大部な書籍であり、1ページの収録文字は40字×40行の1,600字である。つまり、この『全集』は、概算で1,000万字が収録されていることになる。

時代区分によって整理されている点では、便利であるが、各論文の初出年月日、発表誌紙名といった細かな記載にやや難点がある。しかし、自分の蔵書であることから著書に直接マーカーペンで自由に色分け記入ができる利点もあって、専らこの『全集』を使用することとした。図書館の蔵書ではとてもこうはいからである。

1. 梁啓超研究とその周辺

近年の日本における梁啓超研究として、高い評価を得ている先行研究に京都大学の狭間直樹教授を中心とする共同研究「共同研究梁啓超—西洋近代思想受容と明治日本」がある。

当代一流の方々が、4年の歳月をかけたこの研究は、梁啓超研究の白眉である。狭間教授は、研究の動機として、明治日本の文化的達成が近代中国の文明史的転換に深く関わっていたことに対して、それまでの内外の先行研究が「梁啓超と日本」という視点についての「目配りが十分でなかった」から、ということを挙げておられる。⁽³⁾

この本の内容は、①来日以前(2論文)、②思想学術(6論文)、③史伝文学(3論文)、④批評評論(2論文)の4分野13論文で構成され、附録として『新民叢報』所載の梁啓超文章一覧などの資料が掲載されている。

梁啓超の時代区分は、4つに区分されている。

第一期(1890-1899)：国内で変法運動維新運動に従事した「維新運動期」。

第2期(1898-1912)：日本亡命後、辛亥革命後に帰国するまでの「亡命鼓吹期」。

第3期(1912-1920)：大臣就任初め実際政治に従事した「民国従政期」。

第4期(1920-1929)：政界から引退し、研究執筆・教育研究に従事した「文化活動期」、である。

内容もこの線に沿って、①来日以前では、梁啓超の康有為へ入門従学、『時務報』のこと、②思想学術では、「新民説」、「文明の視座」、「西洋撰取と権利・自由論」、「日本の中国研究」、「仏学」、「経済思想」、③史伝文学では、「梁啓超と史伝」、「近代文学観念」、「新中国未来記」、④批評評論では、「啓蒙の行方(梁啓超の評価)」、「近代の超克論」が論じられている。⑤付録も充実していて、後学者にとっては大変に参考になる。

何れの論文も精緻な組立てによって、その研究内容のレベルの高さを誇っている。

また、1983年8月に上海人民出版社から出された丁文江・趙豊田編の『梁啓超年譜長編』⁽⁴⁾も、島田虔次教授の編訳によって、2004年に全4巻で刊行された。

原本は、1212頁のものであるが、日本語訳の『梁啓超年譜長編』は、全4巻、総ページ数は、原本の倍近い約2000頁の堂々たる梁啓超の一代記に仕上がっており、丁寧に編訳作業が行われたことを感じさせる。梁啓超に関心を持つ、後学の徒にとってはまことにありがたい。

梁啓超関係では、この他にも荘光茂樹教授による『近代中国政治の運動と思想』⁽⁵⁾がある。洋務運動、変法運動、革命運動について、それぞれの時代に生きた先覚者を系統的に取り上げている。

特に、梁啓超については、人類政治の進化を族制政体→酋長政体→神権政体→貴族封建政体→専制政体→立憲君主政体又は革命民主政体と論じていること。政治の進化には、一定の段階があり、民権政治をその最終段階としたこと等を論じられている。

梁啓超は、近代中国を彩った胡適、陳独秀、魯迅、郭沫若、毛沢東等にも大きな影響を与えた人であったが、その華々しい活躍の割には、中華人民共和国成立後、それほど高い評価を得ていなかった。それは、梁啓超の立場が、国民党や共産党とは異なった立場

にあったことに起因する。

私がテーマとする日中間のコミュニケーション・ギャップの研究という視点から言えば、「近代中国の文明史的転換」に日本が、深く関わっていたことは、梁啓超を研究している中国の学者も、勿論、資料によって十分に知っていたと考えられる。

梁啓超と日本との係わりについての研究が少ない背景には、上記に述べた理由以外にも、中国の近代史研究では、日本からの影響を研究対象とすることをためらうような社会の雰囲気は過去においてあったのではないかと、思われる。

しかし、近年は、梁啓超が近代中国に残した先駆的な役割について、残された膨大な業績からそれを再評価する動きが出てきたようである。

例えば、雷頤は、「大紀元」(www.dajiyuan.com)の評論「中国的百科全書式“巨人梁啓超の現代意義”の中で文芸復興期には、文化的、思想的に多くの偉人が生まれて芸術、哲学、文学、科学に成果をあげた。このような人類の歴史に大きな影響を与えた偉人を“百科全書式”人物と定義づけ、梁啓超を中国の偉人の1人としている。雷頤は、梁啓超の提議した「群」(社会)の概念を現代の市民社会にも通じる概念として評価している。

梁啓超が、生涯に書き残した文章は1400万字ともいわれる。『梁啓超全集』を一見しても、扱っている論文、評論などその範囲の広さと該博な智識に驚倒する。辛亥革命から日清戦争後の厳しい国際関係の中にあって、梁啓超の示した母国に対するさまざまな提言は、文字通り「百科全書」というに相応しい内容と豊かさを持っている。

日本亡命が、梁啓超の執筆活動に大きなインパクトを与えたことは、間違いない。それは、いみじくも狭間教授が指摘したように「国家体系の骨格がほぼ固まった日本には、中国の変法維新を願う梁にとって、手を伸ばせば届くところに摂取すべき対象がいくらも転がっていた」からである。(6)

しかし、いくら「転がって」いても、それを感知するセンシティブで、有能な頭脳がなければ「対象」は単にそこに存在するものに過ぎない。幼少から鍛えられた知能にして、初めてなしえたことと言えよう。

また、佐々木揚教授の『清末中国における日本観

と西洋観』(7)は、この時代の中国のもう一つの面を見せてくれる。

それは、梁啓超とは別の道を生きた中国人の、世界情勢の変化に対する対応振りである。明治維新以後の日本との関係で見ても、中国の対応にスピード感は乏しいように思われる。日本は、理解すべき対象と考えていなかったのであろう。

例えば、中国が最初に海外常駐使節を送ったのは、1877年のイギリスであった。同じくこの年日本にも公使館が開設されているから、日本を軽視して公使館を開かなかつたわけではない。1871年には、日清修好条約が結ばれているから、明治維新後、3年たつて修好条約が締結されたことになる。のんびりした時代ではあつたであろうが、国の出先機関が条約締結から6年後に設置されたというのは、遅すぎの感は否めない。

要するに、明治維新から10年近くたつて、初めて中国人外交官による日本情報が、組織的に本国に伝えられるようになったのである。黄遵憲による本格的な日本研究書『日本国志』が刊行されるまでにはさらに20年近い歳月を必要としたのであつた。

本稿では、『梁啓超全集』を中心に据えたため、狭間教授の時代区分を参考にしながら、①来日以前(～1898)、②日本亡命期(1898～1912)、③帰国後(1912～)という3区分とし、前述した諸研究が扱っていない日本人、日本書籍等が『全集』にどのように取り上げられているか、を数的に考察した。

但し、膨大な文章の中からチェックする作業であるため、十分留意したつもりであるが、漏れもあるかもしれない。それは他日を期したいと考えている。

2. 『梁啓超全集』所載の「日本」関係文書

先にも記したように『全集』を見れば、梁啓超が、日本から実に多くの事物を熱心に学んだことが、よくわかる。

例えば、『全集』に収録されている文書の中で「日本」ないし「日本人」を表題としているものを上げると、次のようになる。(括弧内発表年)

(亡命前)

1) 『日本国志』后序(1897)

2) 讀『日本書目志』書后(1897) 計2編

(亡命中)

- 3) 政治小説『佳人奇遇』(梁啓超訳)
日本・柴四郎原著(1898)
- 4) 致品川弥二郎 (1898)
- 5) 論支那独立之实力与日本東方政策(1899)
- 6) 日本横浜中国大同学校縁起(1899)
- 7) 論学日本文之益(1899)
- 8) 東籍月旦(1899)
第3節 日本史
- 9) 加藤博士天則百話(1899)
- 10) 記斯賓塞論日本憲法語(1899)
- 11) 記日本一政党領袖之言(1899)
- 12) 中日戦争時代之李鴻章(1901)
- 13) 附論中国封建之種類及欧州日本比較(1902)
- 14) 答某君問德國日本裁抑民權事(1902)
- 15) 答某君問日本禁止教科書之事 (1903)
- 16) 日本之朝鮮(1903)
- 17) 由横浜至加拿大(1902)
- 18) 日俄戦役關於國際法上中国之地位及各種問題(1904)
- 19) 附 埃及国債史 (採訳日本柴四郎『埃及近世史』
12章(1904)
- 20) 朝鮮亡国史略 (1904)
第1期 朝鮮為中日兩國之朝鮮
第2期 朝鮮為日俄兩國之朝鮮
第3期 朝鮮為日本之朝鮮
- 21) 南海先生倦游渡日本同居須磨浦之双涛閣述帰杼敬呈
一百韵 (1908)
- 22) 游日本京都島津製作所贈所主島津源蔵(1909)
- 23) 讀大隈伯爵『開国五十年史』書后(1910)
- 24) 中国国会制度私儀(1910)
第7項 日本帝国貴族院之組織
- 25) 日本併吞朝鮮記(1910)
第1 中日争韓記, 第2 日俄争韓記
第3 日本役韓記, 第4 日本併韓記
- 26) 将来百論(1910)
四 英日同盟之将来
- 27) 附 論徳、日兩國關於責任大臣之立法(1911)
- 28) 時事雜感(1911)
英、美与日 計 26 編

(帰国後)

- 29) 中日交渉匯評(1915)
中日最近交渉平議
中日時局与鄙人之言論
- 30) 对于日本提案第三条之批評(1921)
- 31) 黄梨洲朱舜水乞師日本辦(1923) 計 3 編

日本亡命期間中のものが最も多いのも、初めての外国生活であり、それだけ強い刺激を受けたということであろう。以下、若干の紹介をし、梁啓超の考えについて考察したい。

亡命前の日本関係著作では、『日本国志』后序がある。1897年即ち梁啓超25歳の時の文章である。この本は、初代の駐日公使であった何如璋に随行した黄遵憲の著した『日本国志』の読後感である。日本は「30年間」に禍を福にし、弱さを強さにし、琉球を奪い、台湾を割譲したが、わが政府は、旧態依然として惰眠をむさぼっているとし、そのことを異常だとし、中国の現状に厳しい怒りの念を吐露している。だから、『日本国志』を読んで、日本の政治、人民、土地や明治維新のことを学ぶというのである。

梁啓超が、日本を正視し、そこに学ぶ物があることを感得したのは、この本によってではなかったか。

また、梁啓超の文章には、しばしば日本が「30年間」で維新に成功し、自強の国を作ったという言葉が出てくる。「30年間」に非常にこだわるのである。その元になるのは、明治維新後28年で日本が日清戦争に勝利したことを意味していよう。「30年」間努力すれば、自強の国を作れるという梁啓超にとっての「目標年数」でもあろう。

次の「讀『日本書目志』書后」は、師の康有為の編纂した8,000種に及ぶといわれる日本書籍コレクションの目録、解説書である『日本書目志』の読後感である。

こうしてみると、梁啓超は、日本に亡命する前に、既にかかなりの日本に関する基本的な情報を得ていたことが理解されるのである。

1898年9月からの日本亡命中のものでは、軍艦「大島」の船内でたまたま読んだ柴四郎の政治小説『佳人之奇遇』の翻訳がある。船内で読んだはじから翻訳したという。その後、『清議報』に掲載されたものである。

「致品川弥二郎」は、品川に宛てた手紙で、梁啓超が、康有為の門下生として学んだ時、師から吉田松蔭の獄中での著作『幽室文稿』を渡され、いささかでも意気消沈するようなときは、必ず事本を読むように言われた、と記している。(8)

この手紙は、1898年9月20日付となっているから、来日後、間もなくの時期である。品川は、吉田松蔭の弟子であり、因縁浅からぬ思いがあったのであろう。この手紙では、「啓超因景仰松蔭、東行先生（高杉晋作）両先生、今更名吉田晋、現居牛込鶴巻町40番地、如有賜函、不勝喜盼」(9)との、来日挨拶状を出している。名前を「吉田晋」に改めたというところに、梁啓超の吉田松蔭への思いの深さを感じさせられる。しかし、中国人の側から見れば、来日早々に日本名を持つことは、軽佻浮薄と言われかねない行動かもしれない。

「論支那独立之實力与日本之東方政策」では、現在の世界の大きな問題が、衆目の一致するところ中国であること。欧州人の言によれば、中国は肥沃で物産の豊かな国であり、一種族がこれを私するものではない、という。また、アジア人は、中国はアジアの中核であり、アジアの豊かな地域であり、アジアの自治は、他種族が掠め取ることなどできない、という。

中国人に独立の實力があるか？と問う人に対しては、過去の中国史をみれば分かる、といおう。人々は皆統一の思想を持っており、国内が紛争によって分裂しても、百数十年もすれば、また一つになる。また、他民族の支配を受けても、中国人は決してその民族に同化されることはなかった。

中国は、今、表面上は氣息奄奄としているように見えるかもしれないが、裏面では、潜在的な力を十分に持っており、侮ってはならない。

その理由としては、第1に皇帝が英明、仁勇であること。第二には民間社会の団結が強く、外国人の干渉を許さないこと。第三には海外に7、8百万人の華僑がおり、氣宇壮大で、祖国の役に立つこと、を上げている。(10)

欧州人は、心の中でアジア人を軽侮し、日本人は東洋の主人を思っているけれども、時がたてばその誤りを知ることになるだろうという。

中国に独立の力があるか、という設問そのものが、

意味がない、ということである。日清戦争に敗れ、列強の中国蚕食が進む中で、梁啓超の主張は、中国人たちに勇気を与えたに違いない。

「論学日本文之益」で、梁啓超は、中国人同志に対して日本語を学ぶことを進めている。それは、日本が明治維新以来30年、智識を広く世界に求め、有益な本を翻訳（その数は数千をくだらない）しているからであり、政治学、資生学（経済学）、群学（社会学）、智学（哲学）が、「開民智強国之基」だからという。(11) 中国の西洋文物の導入が、兵学、芸学に偏重しているとの認識から、近代社会には、幅広い領域の知識が必要だという認識である。

また、梁啓超は、日本と中国は、唇齒兄弟の関係にあるという。だからお互いに提携することによって、「黄種之独立」（黄色人種）の独立を保ち、ヨーロッパ勢力の東漸を防ごうという。さらに他日、日本と中国が合邦した時には、言葉の共通が必要である。だから、日本の志士は中国語を学び、中国の志士は日本語を学ぶことを第一義とすべきであると、訴えている。(12) 梁啓超のこの文章は、100年以上前の日中共同体論であり、素朴ではあるが、今日もなお説得力をもっている。

「東籍月旦」は、日本語学習の延長線上にあるもので、数多くの日本語書籍が紹介されている。（『全集』で取り上げられている日本書籍については、後述する。）

「加藤博士天則百話」は、哲学者で東大総長であった加藤弘之博士の発言集である。加藤の社会進化論に興味を引かれたのであろう。

「記斯賓塞（スペンサー）論日本憲法語」は、金子堅太郎がスペンサーと対話した時に内容を記した『故スペンサーと日本憲法』の紹介文である。英国の哲学者・進化論的社会思想家として知られたスペンサーが、生前、金子氏と対話した話をまとめた本である。スペンサーの生前は、この話の公表は許されなかったが、スペンサーも死去し、漸く公表されたものだという。

「中日戦争時代之李鴻章」は、日清戦争時代の李鴻章の事績について論じたもの。ここでも「日本30年来、刻意經營、上下一心…」とう表現が出ており、日本の30年を評価している。日清戦争については、

西洋の新聞論者の、日本は中国と戦ったのではなく、「李鴻章 1 人と戦った」⁽¹³⁾ のだ、といった話が紹介されている。外国との戦争時でも中国の国内体制は、それほどにばらばらであったということである。

「日本之朝鮮」は、1903 年に書かれたものだが、まるで 7 年後の「朝鮮併合」を予見したかのような記述になっている。日本の侵略を懸念する観点から切り込んでおり、この後も「朝鮮問題」は、梁啓超にとって、中国との関連で、目の離せない警戒すべき問題であった事が伺えるのである。

「日俄戦役關於國際上中国之地位及各種問題」は、1904 年 2 月から翌年 8 月まで戦われた日露戦争の帰趨が、どのようになるかに関心が集った頃の文章である。

戦場になったのが、中国の大地だったことを考えれば、その関心も抽象的なことではなく、現実としての「中国之地位」が重要な課題となる。当然のことながら、梁啓超の関心は、戦争終結後の中国の国際法上の立場という、切実な課題に関心が移っていくことになる。

日本は、1910 年に韓国を併合した。「朝鮮亡国史略」は、日露戦争の開始された 1904 年に書かれたものである。梁啓超は、朝鮮問題の分析に際して、3 つの時期に区分して、これを論じている。第 1 期は、中日両国が朝鮮を支配した時期。第 2 期は日露両国が朝鮮を支配した時期。第 3 期が、日本が単独で朝鮮を支配した時代、である。日本は、日清戦争によって中国と、日露戦争でソ連と、いずれも勝利することによって主導権を確立している。

日本の大陸政策に対して、中国が無関心でいることは出来ないのは当然であった。梁啓超の対日批判が厳しくなっていくのも、故なきことではない。

辛亥革命によって、清国は崩壊し、中国は大きな転換点を迎えた。

同時に、梁啓超も晴れて新生の母国に帰国する。この時期から、梁啓超の文章から日本の影が薄くなっていく。

梁啓超の日本観が大きく変わったのは、日本の朝鮮併呑以降と思われる。そして、1915 年、日本が提出した「21 か条の要求」が、その思いを決定付けたように思われる。この問題は、その後の日中間のコミュ

ニケーション・ギャップを決定付ける大きな問題であった。梁啓超は、既に青年期を過ぎ、壮年期に入っていた。

「中日交渉匯評」は、そんな交渉の過程にある時期に書かれたものである。

日本による「21 か条要求」は、梁啓超にとっても大きな衝撃であったようで、日本に対する落胆と同時に、1910 年の朝鮮併合の後だけに、その危機感はいっそう大きなものがあつた。それは、日本が再三朝鮮の領土を保全するといいつつながら、結局、併合したではないか（「日本人宣言保全朝鮮領土、又豈止一度、且屢載之于盟約矣、而今竟何如者？」⁽¹⁴⁾）という文章によく表れている。

来日当初、日本語を学んで日中の合邦に備えようまでといった、梁啓超が、「人々が合邦を欲したとしても、海が枯れ石が腐るようにそれは不可能なことだ」（此殆海枯石爛不能致之事）とまでいうようになったのである。⁽¹⁵⁾

この時期の日本の新聞報道にも厳しい評価を下している。中でも、日本の新聞が、中国の著名人士や新聞について、排日派、とかドイツ派とか称したり、ドイツが、20 万ドルで中国の各新聞社を買収したとかいっていることを厳しく批判している。

要するに、梁啓超は、日本の「21 か条要求」の撤回（「則吾望日本撤回之」）を求めたのである。埋めようもない「ギャップ」が、両国の間に横たわって、大きなしこりを残すものとなった。

先の「中日交渉匯評」は、一連の文章—「中日最近交渉平議」、「中日時局与鄙人之言論」、解決懸案耶要求耶、外交軌道外之外交」、「交渉乎？命令乎？」、「中国地位動揺与外交当局之責任」、「再警告外交当局」、「示威耶？挑戦耶？」—を立て続けに、外交交渉中の日本政府、中国政府に向けて厳しい評論を発表している。梁啓超の気持ちとしては、何よりも日本人に読んで欲しかったのではないかと。

1915 年 5 月 9 日、「21 か条要求」は、日本の最後通牒を受けて、中国政府が受諾し、終結を迎えた。

梁啓超は、直ちに「痛定罪言」を発表した。無念の思いが、表題によく表われている。この文章で、梁啓超は、青年の「為国恥觀念所刺激」とし、国恥觀念について言及し、日本に対する批判を強めていっ

たのである。

3. 梁啓超と「国恥」

日清戦争の始まった1894年、梁啓超は、科挙の受験生であった。この時期、彼は各地を移り歩いたようであるが、時局に発憤しても「私の地位は低く、言説は軽く見られたので、耳を傾けてくれる人などいなかった」⁽¹⁶⁾ 時代であった。

「地位」と「言説」の関係を、影響力という視点で冷静に見つめる姿に、「科挙」の合格寸前まで来ている高級官僚候補である若者の、自負と無念の思いが伺えるのである。

梁啓超の場合も、時代背景を考えた時、国家を意識する高級官僚候補であってみれば、戦いに敗れ列強に蚕食される母国にたいする「愛国＝国恥」意識は、かなり早い時機から持っていたように考えられる。

梁啓超にとって、日本での生活が第1の刺激であったとすれば、第2の刺激はハワイ、オーストラリア、アメリカへの旅行であったろう。アメリカの旅は、中国人排斥運動などもあった時期であり、中国人や日本人に対する不当な扱いを目の当たりにし、愉快なことばかりではなかったようである。しかし、アメリカの豊かさ、アメリカのシステムの実情については、精力的に調査をしている。書籍の知識ではなく、実地に学んだのである。

梁啓超の『全集』の中の「国恥」表現のある文書は、「表1」のとおりである。

日本では、一般に「21カ条要求」を受諾した日5月9日が、「国恥記念日」と言われるようになったことは、辞書にも掲出されているぐらいによく知られている。

「21カ条要求」の受諾を聞いて、無念の思いで書かれた「痛定罪言」の文中には、「国恥觀念所刺激」のほか、「毎遇国恥」、「今欲国恥之一洒」というように、3回にも渡って「国恥」の文言が出てくる。同時に、「愛国」と言う文言も多くなってくる。「愛国」を基盤とし、それを強めた概念が「国恥」ということであろうか。広い中国で国民に影響を及ぼすためには、表現も日本人の感覚から見ると、強過ぎるくらいにする必要があるのかもしれない。

2004年12月28日の産経新聞は、新華社電とし

て「中国では、標準語を使いこなせる人が国民全体の53%である」ことを伝えている。革命に成功して半世紀、「標準語」の普及に熱心に取り組んでも、まだ47%の国民の「標準語」が、怪しいというのである。中国の広さ、多様性を感じさせられる。中国では、話し言葉ではなく書き言葉が重要となる証左でもある。「国恥」も「愛国」も、重要なことはそれらの言葉を使用することによって、「国」や「国民国家」の一員としての意識が醸成されたのではないか、ということである。

ともかく中国人の意識を同じ方向にまとめあげる「キーワード」として「国恥」や「愛国」が重要な役割を果たした、と考える。

下記の[表1]は、『全集』で使われた「国恥」表現の一覧表である。『全集』で、「国恥」の文字が最初に出てくるのは、1898年の「戊戌政変記」である。『全集』では、「国恥」以外にも、「耻」と言う言葉もかなりの頻度で使用されており、「恥」の認識は、近代中国の「キーワード」の一つといえるであろう。

[表1] 梁啓超「国恥」表現

年代	文言（「表題」）
1898	国恥方新之時（「戊戌政変記」）
1898	実為非常之國恥（「戊戌政変記」）
1898	欲令天下人咸發憤國恥（「戊戌政変記」）
1898	損辱國體（「戊戌政変記」）
1898	蚩經國恥歷國難（「戊戌政変記」）
1898	但目擊國恥（「戊戌政変記」）
1898	引國恥如己耻者（「戊戌政変記」）
1898	亡國之恥辱（「戊戌政変記」）
1898	喪師辱國聽之（「戊戌政変記」）
1899	以國恥為己耻（「愛國論」）
1899	有知國恥（「愛國論」）
1899	國恥云者論（「近世國民競争之大勢及中國前途」）
1900	每京國恥何時（「書感四首寄星洲寓仍用前韻」）
1901	國恥紛來（「中國四十年来大事記」）
1902	國家之耻（「中國改革財政私案」）
1902	其民無耻者之無恥國（「新民説」）
1902	中國之恥辱、乃尽雪也（「新民説」）
1902	歷史上第一次之國恥（「黃帝以后第一偉人趙武靈王

	伝)
1902	免将来入博物院增一国恥而已(「新大陸游記節」)
1902	物耻可以振之、国恥可以雪之(「却灰夢傳奇」)
1902	将来民氣漸新、或者国恥可雪(「新羅馬傳奇」)
1903	是誠吾国民之恥辱(「服従釈義」)
1904	若夫革命而可以救中国耻?(「中国歴史上革命之研究」)
1904	以辱国故。国重于国、君而辱国(「中国之武士道」)
1904	以我国近数十年来所更之国恥(「中国之武士道」)
1904	而忘国事之耻(「中国之武士道」)
1914	而貽法人以歴却不忘之国恥記念(「欧州戦役論史論」)
1915	为国恥觀念所刺激(「痛定罪言」)
1915	每遇国恥(「痛定罪言」)
1915	今欲国恥之酒(「痛定罪言」)
1915	座是為法人留一絶大之国恥記念(「欧州蠡測」)
1923	不識国恥為何事(「黄梨洲朱舜水乞日本辨」)
1923	故士大夫之無恥、謂之国恥(「中国近三百年學術史」)
1924	国恥記念(「第十度的「五七」」)
1924	国恥記念(「第十度的「五七」」)
埔	国恥記念(「第十度的「五七」」)
1928	君果以身殉国(「恥錫蘭島臥仏」)
1928	聽聽汝小生、雪汝国恥鼓汝勇(「題啓郷樓圖」)

日本の「21 カ条要求」以降、社会的には、頻繁に使用された「国恥記念日」という言葉であるが、梁啓超に関しては、逆にその使用頻度が下がっている。

4. 『全集』に現われた日本人

日本人との関わりと言う観点で『梁啓超全集』眺めた時、どのような日本人が現われてくるであろうか。出現度数によって、梁啓超がどのような思想傾向の日本人に関心を持ったが理解できる。

[表2]は、全集に掲載された論文の中で、日本人に言及した延べ回数の一覧である。これで見分けるのは、日本の朝鮮併呑を論じた「日本併呑朝鮮記」(1910年)の48人をトップに、次いで日本で活躍した儒学者の朱舜水先生のことを記した「朱舜水先生年譜」(1923年)が第2位を占めている。

冒頭に紹介した「21 カ条要求」に際して梁啓超が発した「日本は、我国を第二の朝鮮なりと認識する勿れ。」の発言がここで蘇る。

日本を見る目の厳しさ。単純に日本の文物を紹介、導入するというのではなく、中国と日本との「間合い」をしっかりと観察している梁啓超の目をそこに見るのである。

狭間教授は、梁啓超の生涯を4期に分けたが、私は、日本との関係でいえば、日本から帰国した1912年が、一つの分水嶺で前後期に分けられるのではないかと。日本から帰国したと同時に、亡命初期のような日本の刺激を受けることも少なく、逆に心を痛めることの多い日中関係のなかで、精神的に日本から離脱することを欲したのではないかと考えられるからである。特徴的な2つの論文—「日本併呑朝鮮記」は、1910年の作品として前期に位置する。一方、「朱舜水先生年譜」は、1923年の論文であり、研究・教育に専念した後期のものである。資料は、前期のピークが1910年であり後期のピークが1923年であったことを示しているのではないかと。

[表2] 日本人の出現回数

*5名以上を記載した論文

論文名	人数
日本併呑朝鮮記	48人
朱舜水先生年譜	33人
自由書	22人
新民説	19人
戊戌政変記	9人
記東俠	9人
論中国成文法編制之沿革	8人
開明専制論	7人
中国国会制度私議	7人
世界史上広東之位置	6人
啓告当道者	6人
中国之武士道	5人
朝鮮亡国史	5人
南海康先生伝	5人
啓告国人之誤解	5人
中国歴史研究法	5人
詩話	5人

また、どのような日本人が取り上げられているか

については、[表3]のとおりである。

梁啓超の日本亡命に手を貸した伊藤博文が、第1位となり、延べの出現回数は69回であった。第2位が江戸時代の儒学者安東守約(省庵)であった。安東は、明の朱舜水が来日した時、長崎にいて師事し俸禄の半分を贈ったという関係にある。(朱舜水は、後に日本に帰化した)。

水戸(徳川)光圀が、第3位になっているのも水戸藩が朱舜水を招いたことと関係が在る。

吉田松陰は、梁啓超の尊敬する日本の師であった。彼の日本名は、吉田晋であるが、その名前が吉田松陰と高杉晋作から命名したものであるのを聴けば、納得がいく。

明治の政治家では、伊藤博文、星亨、西郷隆盛、大隈重信、井上馨、大久保利通、木戸孝允。教育者では福沢諭吉、加藤弘之、穂積八束、穂積陳重が5回以上となっている。明治維新以降の「30年間」に活躍した日本人の出現回数が多い傾向にある。

今日では、日本人でも知らない歴史上の人物も沢山いる。それだけ梁啓超の関心領域が広く、歴史的にも長かったと言うことであろう。

[表4] 『全集』と日本人

順位	氏名	回数	順位	氏名	回数
1	伊藤博文	69	22	織田万	4
2	安東守約	51	23	桂太郎	4
3	水戸(徳川)光圀	47	24	清水三折	4
4	吉田松陰	39	25	目賀田種太郎	4
5	星亨	22	26	森有礼	4
6	福沢諭吉	17	27	金子堅太郎	4
7	小宅生順	17	28	陸奥宗光	4
8	西郷隆盛	16	29	鳥居龍蔵	4
9	大隈重信	14	30	守山茂	4
10	加藤弘之	13	31	大鳥圭介	3
11	井伊直弼	11		小村寿太郎	3
12	井上馨	10	32	三条実美	3
13	穂積八束	10	33	渋沢栄一	3
14	板垣退助	8	34	白鳥庫吉	3
15	穂積陳重	7	35	曾根荒助	3
16	大久保利通	7	36	高山彦九郎	3

17	木戸孝允	7	37	矢野龍溪	3
18	寺内正毅	7	38	中山久四郎	3
19	奥村庸礼	6	39	鍋島直能	3
20	黒川正直	5	40	村上専精	3
21	有賀長雄	4	41	望月信享	3

上記のように、個人名ではなく、『全集』で日本人がトータルとしてどの程度出現しているか、調べたものが、[表5]の数字である。交流の増加と日本人数とは、相関関係が在るのではないかと考えたのだが、その見込は外れたようだ。いずれも延べ数であるが、最も多かったのが、1923年であるのは、意外な思いもする。これは、日本に来た儒学者の「朱舜水」を取り上げ、彼にまつわる人達を記述したことによる。つまり、中国人向けに、中国人・朱舜水の影響力が日本でいかに大きかったことを強調したことにもよる。一種のナショナリズムを満足させる愛国的な論文といえないこともないが、徳川時代の日本人が、如何に中国人儒学者を尊敬し、大切にしていたか、という観点でみれば、時期が時期だっただけに、好ましい過去の事実は、影響するところが大きかったのではあるまいか。

[表5]の右側の「在華日本人顧問大事年表」⁽¹⁷⁾は、李廷江教授の調査による明治期に中国に渡った日本人顧問の件数である。件数であって、人数ではないが、梁啓超の取り上げた日本人の年度別数値と同じような値となっていない。

むしろ、「21カ条要求」の日中関係が悪化してから増加している。それだけ、中国における日本の権益が増加し、日本人技術者が多くなったためであろう。

李教授の研究では、1883年から45年の60年間におよそ7,000名の日本人顧問が、中国で仕事し、滞在していた。⁽¹⁸⁾また、こうした日本人顧問は、2つの相反する側面を持っていたという。第1は、日本の中国政策遂行のための顧問、第2は中国政府招聘の技術者等中国近代化に協力する「助力者」としての顧問であった。

表5

在華日本人

日本人の 出現数

顧問大事年表

年度	回数	年度	回数	年度	件数	年度	件数
1896	5	1896	4	1896	0	1913	40
1897	11	1913	0	1897	2	1914	37
1898	24	1914	2	1898	6	1915	40
1899	82	1915	8	1899	7	1916	37
1900	5	1916	0	1900	0	1917	41
1901	36	1917	0	1901	1	1918	53
1902	66	1918	0	1902	11	1919	52
1903	0	1919	0	1903	21	1920	56
1904	42	1920	0	1904	11	1921	1
1905	41	1921	14	1905	26	計	667
1906	3	1923	192	1906	29		
1907	1	1924	0	1907	21		
1908	122	1925	0	1908	38		
1909	13	1926	0	1909	35		
1910	4	1927	1	1910	30		
1911	2	1928	0	1911	30		
1912	0	計	678	1912	42		

5. 日本人の著作及び著書

『全集』に記載されている日本人の出版物は、延べで225冊である。このうち、外国人の日本語翻訳出版物が24冊ある。従って、取り上げられた日本書籍の中で純粋の日本語出版物は、201冊ということになる。

[表5] 日本人著者と著作(上位5位)

著者名	著作
望月信享	「起信論」之作者
望月信享	「疑似経与偽妄経」
望月信享	「關於『大乘起信論』作者之疑議」
望月信享	「大乘起信論」支那撰述考
望月信享	三度論「起信論」為支那撰述
望月信享	「起信論」学説与「占察経」之類同及關係
望月信享	「大乘起信論」之研究
浮田和民	『西洋上古史』

浮田和民	『日本帝国主義』、
浮田和民	『帝国主義之理想』
浮田和民	『民間教育』
浮田民雄	『政党史』
柴四郎	『埃及近世史』
柴四郎	『佳人奇遇』、
柴四郎	『韓国之将来』
柴四郎	佳人奇遇
柴東海	『佳人奇遇』
藤田鳴鶴	『系思談』、
藤田鳴鶴	『梅蕾余薫』
藤田鳴鶴	『文明東漸史』
藤田鳴鶴	『春窓綺話』
藤田鳴鶴	『経世偉観』
松本文三郎	『起信論』考
松本文三郎	『起信論』后考
松本文三郎	『起信論』考
松本文三郎	「起信論」之訳者与其注疏
松本文三郎	『支那仏教遺物』

最も出現回数が多かったのは、[表6]のように望月信享の7回で、以下、5回が、柴四郎、藤田鳴鶴、松本文三郎、浮田和民の4人。表には採録されていないが、4回が有賀長雄、大隈重信、穂積陳重、村上専精、元良元次郎であった。

『佳人奇遇』のように、同一書籍が4回も紹介されるケースは珍しい。

明治時代の中国は、日本を経由して西欧文化を導入したといわれるが、先に触れたように、翻訳出版物の少ないことは意外であった。日本人学者によって咀嚼された専門書が、紹介されているということである。

もともと日本と中国の関係では、漢文を習い直接的に中国を理解できたから、翻訳の必要がなかった。香港中文大学の譚汝謙博士によると、現在ある資料から見る限り、1911年以前に日本で翻訳された中国語書籍は、11冊に過ぎない⁽¹⁹⁾と言う。それが、当時の日中関係の真実であった。梁啓超が、日本語の速習についての書いているが、日本語と中国語が、日中の中で「学問的共通言語」でなくなったのは、日本語の書籍が中国語書籍より、学問的に先陣を切

りはじめた明治以降と言うことになる。

『全集』に採録されている日本語書籍を見ると、226冊のうち1910年以前のものが、9割近くを占めており、時が経つにしたがって日本語書籍が少なくなっている。

先の、譚博士の研究では、日清戦争の以前の中国で、翻訳された日本語の書籍は、1冊に過ぎなかったという。⁽²⁰⁾ 大国である中国がわざわざ日本語書籍を翻訳する必要性を感じなかったからである。明治維新と日本の富国強兵策が成果を上げるようになって、大量の日本語書籍が中国語に翻訳されるようになったのである。同様に、日本が中国の社会科学関係書籍を翻訳導入するようになったのは、1912年の辛亥革命がきっかけになったという。中華民国の成立によって、中国社会理解の必要性が高まったからである。

中国の留学生は、日本に西洋を学びに来たと言われる。あくまでの「本家」は欧米という発想である。しかし、どのような動機であれ、人間の相互交流は、積極的に進める必要がある。「本家」とか「分家」とかの区分はない。どこの国であれ、留学生にとっては、留学先の言語を学ぶことが基本であり、言葉は文化そのものだから留学先が「本家」と言うことである。そこに書籍の持つ重要性があるのである。

ちなみに、1660年から1978年までの間に日本語から中国語に訳された書籍は、総数で5765冊。中国語から日本語に訳された書籍は、3335冊であったという。⁽²¹⁾

6. おわりに

今回は、『梁啓超全集』に挑戦し、梁啓超の文章から、日中間のコミュニケーションギャップの問題を考察した。残念ながら、私自身の中国語能力の不足もあって、よく理解できずに隔靴搔痒の思いのすることも多かった。実際には、膨大な文章を眺めることだけに追われてしまった感は否めない。

梁啓超にとって、日本は亡命先であり、思索の場所でもあった。全体を通観して、梁啓超の母国中国の将来にかける真摯な建策に、終始圧倒されるような思いであった。

日本人の立場で見れば、あの時代に「こんなに凄

い人をよくぞ救ってくれた」との思いに尽きる。もし、梁啓超が、戊戌政変で刑死していたなら、日中両国にとって、どれほど大きな損失であったか計り知れないし、今日、これだけ豊かな業績を読むことが出来なかったからである。そして、もし当時からこの膨大な論文が、日本向けに日本語に翻訳されていたなら、相互理解に役立ったであろう。

日中間のコミュニケーション・ギャップの観点でいえば、日本亡命の初期に見られた梁啓超の素朴な日本への期待感一日中合邦論などーの思いは、日本の外交政策によって裏切られ、遂には、合邦論を完全に放棄するに至ったことに、日本から彼の気持ち離れていく様子が感得されるのである。

資料から分かるように、戦前も戦後もこれだけ多数の日本の資料を使い、これだけ沢山の日本人を自分の論文に登場させ、正面から日中関係を論じ、中国に影響を与えた人もいないのではないかと。

過去から学ぶことは、多い。未来は、過去をしっかり踏みしめる道によって拓かれるものであることを、改めて教えられた。

梁啓超は、日本が「21 か条要求」を提出した時、痛切な思いを「中日時局与鄙人之言論」で記し、それを東京朝日新聞が引用し掲載したことは既に述べた。しかし、東京朝日新聞は、梁啓超が結論的に記した最も大切な末尾の文章を何故か除外しているのである。それは、「吾願日本人慎思之」という一句である。日本人の「慎思」を願うと結んでいるのである。

梁啓超の想起した「慎思」は、「中庸」にある「博学之、審問之、慎思之、明弁之、篤行之」（博く之を学び、審かに之を問ひ、慎んでこれを思い、明らかに之を弁じ、篤く之を行ふ）から来ているに違いない。人は、何を学び、何を弁じ、何を行ななおこなおうとするのか。唇齒輔車の関係にある日中の大事に際して、「慎思」してほしい、といったのである。それは、頭で考える、理論や、理屈ではなかったであろう。

東京朝日新聞が、除外した「慎思」の一句は、そのまま当時の日本が中国に対して、除外した言葉でもあったのである。 (了)

[註]

(1) 『東京朝日新聞』(復刻版)大正4年2月3日

東京朝日新聞には、引用した原典が何であったかが記載されていない。『梁啓超全集』第5冊、「中日交渉匯評—中日時局与鄙人之言論」には、下記のような記述があり、この一文部分がらの引用であると思われる。

「吾更欲赤裸裸的為日本人一言、吾勸日本人切勿誤認題目、以第二之朝鮮視我中国。彼日本在朝鮮之交渉、積有經驗、習見夫曠昔朝鮮、有所謂聯俄党者、有謂聯日党者、因以生中国亦必爾爾、殊不知我中国絶非朝鮮比也。我国雖積弱已甚、而国民常自覺其国必能毅然巋然立于大地、歴却不磨、此殆成一種信仰、深銘刻于人人心中、而未由拔、故所謂某国党某国党者、終古決不能出現我国中。凡以正義待我者、無論何国、吾皆友之、凡以無礼加我者、無論何国、吾皆敵之。(中略) 吾惟願日本对于我国國際之交渉、勿忘却我国与日本、猶同為平等之国家、对于我国個人及社会之批評、勿忘却我国人与日本人、固有為有理性之人類。」

この文の最後は、「吾願日本人慎思之」とあるが、残念ながらそれは新聞報道には乗っていない。今日にも通じる味わい深い文章である。

(2) 雷頤「中国的“百科全書式“巨人梁啓超的現代的意義」、『大紀元』、2001年6月13日。

(www.dajiyuan.com)

(3) 狭間直樹編『共同研究梁啓超』、みすず書房、1999年11月。

(4) 島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第1巻、岩波書店、2004年1月(第2巻、2004年3月、第3巻、2004年5月、第4巻、2004年7月)

(5) 莊光茂樹『中国近代政治の運動と思想』、時潮社、平成10年2月10日

(6) 狭間、前掲書、序文VIページ。

(7) 佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会、2000年12月15日。

(8))狭間、前掲書第1巻、277頁。

(9) 張品興主編『梁啓超』第10冊、北京出版社、1999年7月、5912頁。

(10) 張品興主編、前掲書第1冊、316頁。

(11) 張品興主編、前掲書、324頁。

(12) 張品興主編、前掲書、324頁。

(13) 張品興主編、前掲書、536頁。

(14) 張品興主編、前掲書第5冊、2761頁。

(15) 張品興主編、前掲書、2761頁。

(16) 島田、前掲書、72頁。

(17) 李廷江『近代日本における日本人顧問(1882～1945)』(平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(2) 研究成果報告書)、平成11年3月。

(18) 李前掲書、1頁。

(19) 譚汝謙主編『日本訳中国語書籍目録』、香港中文大学出版社、1981年、33頁。

(本書は、アジア財団、日本国際交流基金、の補助金得て出版されたもので、同じ年に『中国語訳日本書籍綜合目録』も中文大学から出版され、『日本訳中国語書籍目録』と対をなしている。)

(20) 譚汝謙主編前掲書、33頁。

(21) 譚汝謙主編前掲書、44頁。

(Received:December 31, 2004)

(Issued in internet Edition:January 31, 2005)